

# 楽しい夏休みを



# 安全に海やプールで遊ぶ



いよいよ夏本番です。子どもたちによる水遊びや花火は、日本の夏の風物詩といえます。しかし、花火による火傷や火災、海や川での水難事故が毎年発生していることも事実です。今回は特に子どもたちの水の事故について考えてみましょう。

## 1 水の事故

子どもたちは、好奇心と行動力のかたまりです。そんな子どもたちの水による事故は、周囲の大人たちが気を配って予防するしかありません。皆さんは、子どもたちの水の事故と聞けば海や川を想像するでしょう。

しかし、子どもは体に比べて頭が大きく、力もあります。誤って水の入った浴槽などに落ち込むと、自分ではなかなか起き上がることができません。鼻と口をおおうだけの水があれば、家庭内であっても事故は起こりうるのです。家庭内の浴槽や洗濯機、トイレなどに潜む危険を見つけ

出し、先手を打って対策をたてましょう。

## 2 溺れるとどういふ

「溺れる」というのは、どのような状況なのでしょう。これは「水などが気管や肺に入り、空気が吸えなくなること」をいいます。

溺れ始めると「息こらえ」をします。そのうちに喉の奥まで水が浸入すると、何とか水を出そうと「咳込み」と「飲み込み」を繰り返します。その後、呼吸ができないうちに低酸素状態となり、進行すると心停止に至る危険な状態となるのです。

## 3 湿性と乾性

溺水の種類として、気管や気管支に液体が浸入している状態のものを「乾性溺水」といいます。「水を飲んでいないのに溺れるのか。」と思われるかもしれませんが。しかし、液体が喉の奥まで入っていると、反射的に「口頭痙攣」という状態が起こり、声門が閉じてしまうことがあります。その結果、呼吸ができなくなるのです。液体が気管や気管支に侵入している状態を「湿性溺水」といいます。

## 4 低体温状態

屋外で溺れた場合、体の温度は下がっていきます。これを「低体温症」といいますが、進行すると、心室細動という致命的な不整脈や血管の収縮による全身の循環不全が起こります。しかし、低体温状態では体の代謝は抑制され

るので、その分、体の組織は保護されます。そのため蘇生の可能性は高くなります。通常、心肺停止から約5分で蘇生率は25%程度まで低下しますが、冷水に40分間浸かっていた少年が、後遺症なしで蘇生した事例もあります。低体温状態の場合、あきらめずに根気強く心肺蘇生法を続けることが大切です。

## 5 溺水の救命処置

溺水者が救助されたら、素早く循環のサインを確認（傷病者の口に耳を近づけて、呼吸運動、咳、その他の体動などの有無を10秒以内に観察）し、なければすぐに人工呼吸と心臓マッサージを行います。この時、水を吐かせる必要はありません。また、呼吸を確保する際、飛び込みによる頸椎損傷の可能性も考え、気道確保は慎重に行い、口の中に水中で吸い込んだ異物がないか確認してください。



呼吸や脈がある場合にも、意識がなければ気道確保はしてください。嘔吐があるようなら横向きに寝かせたり、顔を横向きにさせて、嘔吐物が気道に入らないようにし、毛布などで保温して医療機関に運びましょう。

楽しいはずの夏休みですが、思わぬ所に落とし穴があるかもしれません。安全に過ごすために、正しい知識を身につけ、たくさん思い出を作りましょう。

なお、松前消防署では、心肺蘇生法や救急応急手当の講習会を行っています。少人数からでもお気軽にお問い合わせください。いざという時の知識と技術を身に付けましょう。

### 問い合わせ

松前消防署救急係

☎ 984-3404

